| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 障害児の発達教育論 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教 1 年 | | 受講者数 | 約 200 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 昨年度<br>①毎授業終了時、小さい用紙に、授業の感想・意見・質問などを学生が記名式で記入し、回収した。<br>②翌授業にて、コメントペーパーにあった質問に対し、スライドを用いて回答説明した。<br><br>本年度<br>③毎授業、15 回のコメントを記入できる B4 用紙を配布（返却）し、その日の授業の部分に記入した。<br>④毎授業後に回収し、翌授業までに、学生のコメントに授業者が一言書き添えるようにした。<br>②は同じく継続している。 | | | | |
| 取組みの効果 | ①を③に変更したことで、学生が自分自身の学習を、全授業を通して一瞥できるようになった。<br>④を加えたことで、授業者の負担と、翌授業で返却に時間を要することになったが、学生からの反応は悪くないと感じている。 | | | | |
| 今後の課題 | コメントペーパーの記入事項について、学生同士の意見交換など、客観的に自分のコメント（文章）を評価する機会を作れていない。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教育心理学 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教１年 | | 受講者数 | 約 120 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 毎回の授業の開始５分間で小テストをしている。前回の学習内容を３問程度にして出題し、その直後５分間ほどで解説する。小テストプリントの下半分には、質問・意見・感想を書く欄があり、授業の最後５分ほどで自由に書かせている。 | | | | |
| 取組みの効果 | 記憶として定着していることが、定期試験の出来に反映されている。理解できていなかったことを自覚し、質問という形で確認できる。授業者からは、学生たちの理解度を把握し、次回の授業に生かすことができる。 | | | | |
| 今後の課題 | 現在は復習としての効果があがっているが、予習をさせて授業時間中の「考える時間」を増加させたい。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教科生活 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教１年 | | 受講者数 | 約 100 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 近年、教員の中でも特に若手の小学校教員は、動植物の飼育栽培や観察の指導が苦手であると指摘されている。小学校教員を目指す学生のための本授業、「ワークショップ（１）動植物を育てる」においては 、実際に野菜のラディッシュの栽培をグループ単位で行うという手法を取り入れた。約６人のグループを構成し、中央キャンパス内に小型のプランターを置き、約４５日間、ラディッシュを種から栽培し、最終的に収穫して調理するという一連の単元の流れを学習させた。この授業では、子どもが身近な植物に興味・関心を抱き、それらが生命をもって成長していることに気付くことができるようにするためには、教師のどのような言葉がけや働きかけが有効なのかを実際の栽培体験を通して学ばせることが目標である。また、教材研究の立場から、栽培を成功させるための情報を図書やインターネットを利用して集めさせ、グループで協力して、収穫まで水やりや肥料を与えたりするなどの世話を行わせた。しかし、うまく育てることばかりが学びではなく、枯れたり虫に食べられたりしたときの悲しみを感じることも子どもの成長にとって必要な経験であることも学ばせた。 | | | | |
| 取組みの効果 | 学生は「もっと上手に育てたい」という願いを持ち、その願いを実現するために土、水、日照、肥料といった植物の生育条件に目を向けるようになり、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、栽培に反映させた。このように実際の栽培活動を通して、子どもには多くの気付きが生まれるとともに植物に対して親しみの気持ちが生まれ、責任感が育ち、生命の尊さを感じることができるということを学生は実感していた。この体験活動を教材研究として実際に学生が行うことにより、将来、小学校において子どもに効果的な指導ができる知識、技能を身に付けることができたといえよう。 | | | | |
| 今後の課題 | 課題としては、まず、学習グループの中で栽培活動に対する意欲の差が見られたことが挙げられる。収穫まで栽培に関する当番を決めるなど、役割分担を図るのだが、世話を熱心にする学生とそれほど関心を持てない学生とでは学びの深まりに違いが生じた。また、収穫までの約４５日の中で、栽培に関する意欲を持たせ続けることも工夫が必要であり、講義のたびにプランターを教室に運び、観察したり、栽培計画の見直しをさせたりしたが、中だるみは否めなかった。今後は、栽培の教育的意義などさらに詳しく講義して、学生に学びの目的をよりはっきりと持たせるなどの改善が必要であろう。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教科国語 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教１年 | | 受講者数 | 約 90 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☑ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 基本的に授業は発問から開始し、近くに着席している２～５名でグループを作り、話し合わせて授業記録用紙（２枚組でカーボン紙に写るようになっている）に解答をまとめさせて１部を回収する。<br>その後、１問につき３グループ程度の解答を紹介し、適宜、コメントする。<br>続いて、発問形式のタイトルをつけ、重要事項を印字し、スペースを十分取った講義要旨のプリントを配布することによって、学生が授業を聞き考えることに集中し、積極的に参加できる授業を実践している。 | | | | |
| 取組みの効果 | 発問に対して、学生たちがグループで積極的に話し合い、解答をまとめるという作業を通して、そのテーマに強い興味をもち、授業に積極的に参加するようになった。 | | | | |
| 今後の課題 | 学生たちに国語に関する知識をつけさせるとともに、学生自身の国語能力を伸ばしていくことを目標とした科目であるため、学生の主体性を伸ばすという点では不十分な面がある。<br>この主体性を伸ばす授業を、いかに実現させるかが今後の課題である。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教科社会 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教１年 | | 受講者数 | 約 100 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み<br>☐ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | シラバスでは、科目の到達目標としては、次のように設定した。「主に、小学校社会科の学習指導要領や小学校社会科の授業内容について解説を行う。到達目標としては、小学校社会科の学習内容について理解することである。日々のニュースや出来事などを通して、社会に関心を高めることである。」授業方法としては、「前半部分は、講義型授業である。後半部分の各学年の学習内容については、グループで学習内容を検討し、発表する。」と記載した。授業を終えてみて、前半部分は、シラバスに記載通りの講義型授業を行ったが、一方的に教員が話をするのではなく、配布資料の空白部分に重要事項を記入することや、ＤＶＤを視聴した感想を記入するなどの工夫を行った。後半部分は、ワークショップ形式で、受講者が小学校社会科の授業内容を教材化する取り組みを行った。また、各学年の学習内容の理解を深めることが出来るよう、様々な資料を活用した教材作成について検討した。時間外学習を促す取組みとしては、日々のニュースでは、どのような出来事が起こっているのかを世界地図の白地図を配布し、どの国で起こった出来事であるのかをまとめ、レポートとして提出させた。 | | | | |
| 取組みの効果 | 小学校社会科の学習指導要領や小学校社会科の授業内容については、受講者は十分に理解することができていた。ワークショップ形式で、小学校社会科の授業内容を教材化する準備は、もう少し丁寧に時間をかけて行うと、さらにより良い取り組みが出来たと思う。授業後に記載してもらうコメントペーパーを読むと、小学校社会科の授業内容に関するＤＶＤを視聴することにより、実際に授業を行うイメージを掴むことが出来たようである。グループ活動を行うことにより、一方通行型の講義ではなく、メリハリをつけて授業を行うことができた。 | | | | |
| 今後の課題 | 受講者は、小学校社会科の学習内容が、どのような内容であるのかを理解することは、ある程度はできたと思う。しかし、授業評価アンケートでは、時間外学習の時間を十分に行っていないことがわかった。今後の課題としては、時間外学習の時間を十分に確保することができるよう、次週の講義までに何らかの課題を提示する必要性を感じた。また、新聞を購読していない、あるいはあまり読まない学生がおり、日々の出来事やニュースに、関心を持つように声をかけて、社会の出来事により関心を高め、どのような社会を創造するのが良いのかを、学生が真剣に考えることができるように取り組みたい。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教育原論 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教１年 | | 受講者数 | 約 90 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐　理解を深める取組み | | | | |
| | ☐　意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | ☐　発言を促す取組み | | | | |
| | ☐　時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☐　学習態度を良くする取組み | | | | |
| | ☑　その他（以上を同時に追求する取組み　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 受講生を４人ずつの２２チームに編成し、課外活動を組み込んだグループ活動の成果を授業で交流し、学習し合う授業を試みている。授業のやり方は以下の通りである。<br>○テキストの割り当てられた章を読んで、要点をまとめた上で、自分たちが①興味深く思ったことや新たに学んだことを明確にし、②疑問点やわからなかった点（フロアに意見を聞きたいこと）を指摘する。それをチームとしてハンドアウトにまとめ、授業時に全員に配付する。<br>○発表時間２０分、質疑応答１５分程度。以上のやり方で、毎回２チーム（テキスト２章分）ずつ進める。<br>○フロアからの質問が低調である場合を考えて、質問チームを各章に２チームずつ割り当てる。<br>○教員は進行について助言をする一方で、各発表の最後に、総評を兼ねて、疑問点やテキストの要点について解説。<br>○自己学習を可能にするための評価の試みを導入。自己の現状（水準）を知り、自らの課題を自覚するための評価であり、他者の見方を参考にすることの重要性を自覚して、教師としての成長の基礎をつくるのが目的である。フロア各チームからの発表チームへの評価と、発表チームによる自己評価を所定の評価シートに基づき、それぞれの発表ごとに実施。 | | | | |
| 取組みの効果 | 本年度から開始した取り組みであり（４月に本学に着任）、前任校で同様の試みは経験があるが、学年や受講者数がかなり異なる上に、中身も変えたのでどのような効果があるかはまだわからない。 | | | | |
| 今後の課題 | ○学生たちはきちんと課題をこなし、授業は滞りなく進んでいる。パワーポイントを用いるチームも少なくなく、発表には創意工夫もみられる。だが、テキスト読解の読みはまだ浅い。発表や質問が自己目的化する傾向もあり、授業中の対話・応答は十分とはいえない。また、チームで集まっての課外学習の時間が十分に取れないとの報告も受けている。<br>○受講者がまとめた配付資料の印刷や授業の進行などで TA の協力が欠かせない。本年度は２クラス各１名ずつ確保できたが、今後は不明であり、このような授業を続けていけるのか、先が見通せない。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教職への道 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教１年 | | 受講者数 | 約 150 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☑ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | この授業は、教職、特に小学校教諭につくための基礎科目である。ただ、保･幼コースか小コースかを選択する前のため、学科では、保育者論とともに、全員が受講するように指導している。<br>１年３クラス分の学生と編入生の半分という大人数で構成される講義科目である。<br>また、３限のため、昼食が終わってから１３時過ぎて集まる学生が多い。<br>①ガサガサとした中での授業開始なので、学生の気持ちを落ち着かせ、集中させるために、授業の初めに、絵本の読み聞かせを取り入れた。絵本は、できるだけ、小学校に関わるもの、小学生に関わるもの、学級づくりや特別支援教育、心の教育に関わるものを選んだ。<br>②授業では、パワーポイントを使ったが、実践の写真や実際の授業の様子などの映像を組み込んだりして作成した。<br>③大人数のため、教室がいっぱいで、席を移動した活動は難しく、講義を聞くだけの時間が殆どである。そのため、授業の中に、個々で考えたり、近くの学生と話し合ったりする活動を取り入れ、その後、発表させる時間を設定した。 | | | | |
| 取組みの効果 | ①読み聞かせも、はじめは、本を抱えてやっていたが、書画カメラを利用してスクリーンに映し出すことによって、より注目をするようになり、授業の内容に、落ち着いて入ることができやすくなった。<br>②実際に小学校の様子を映像で見ることで、自分の小学生時を思い起こして、比べることができたし、今の小学校教育への興味関心を揺り起こすことができた。<br>③友だちと意見を出し合ったり、わずかな人数だが、自分の意見をマイクで発表する機会を作ったりして、課題について考えることができた。 | | | | |
| 今後の課題 | 学生は、約 150 名が受講し、しかも、はじめから幼稚園教諭や保育士をめざして小学校教育に関心のない学生も多い。まず小学校に興味関心を持たせることから始めなければならなかった。<br>担当２人で時間と内容を分け、本担当者の内容は、とくに小学校の実践そのものや実践から学ぶことである。そのため、話だけでなく、視覚に訴えるものが必ず必要であると感じた。また、振り返りを書かせてはいるものの（読むだけでもかなりの時間を割いている）、それを基にしたディスカッションも入れて、小学校教育に対する学生の考えを明らかにしたり、まとめていったりすることができておらず、今後の課題である。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教育哲学 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教２年 | | 受講者数 | 約 80 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | ☑ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | ☑ 発言を促す取組み | | | | |
| | ☐ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☐ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | ☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 自己理解・他者理解に関する洞察を深め、受講者同士の意見交換をうながすため、体育室にて身体表現をともなうグループワークをおこなった。 | | | | |
| 取組みの効果 | 講義室でおこなうよりも受講者同士の交流は活発になった。しかし、体育館が非常に暑かったためワークを継続することが困難だった。座っているだけでも汗がしたたり、配布資料が濡れて読めなくなるほど。 | | | | |
| 今後の課題 | ４年前赴任当初の事例であるため、現在は冷房設備のある体育室や、トレーニング室を用いるなど、問題は解決している。授業規模（受講者の定員）の縮減による、受講者中心の学習（いわゆるアクティブラーニング）の推進が、今後の課題であると思われる。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 総合学習論 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教２年 | | | 受講者数 | 約 70 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | ☑ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | ☐ 発言を促す取組み | | | | |
| | ☑ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☐ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | ☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | ガイダンスの際に、評価基準を明示した 15 回分の毎回の予習課題（A4 版　1 枚のレポート）を提示した。授業はじめにそのレポートをグループで読み合い、確認した後に、全体の中から２名程度発表をさせ、毎回の講義内容のねらいを学生と共有した。講義においては、予習した内容を補完、充足するものを準備し、講義やグループワークを取り入れて構成するようにした。授業末には、本講義の学びのふり返りを A5 版の用紙に記入させた。授業後に、全てのレポートを評価規準に従って採点を行い、次回の授業前に返却するようにした。 | | | | |
| 取組みの効果 | 「予習をしてきているので、講義内容がよく理解度できた」「教科書を使って予習できるので効果的だった」「レポートを丁寧に見ていただけるのが良い」という学生の反応が多かったが、学生の中には「毎回課題があるのは大変だ」という声も少なからずあった。 | | | | |
| 今後の課題 | この講義が合計３講義あったため、授業準備とレポートのチェックに莫大な時間がかかり、身体を壊しそうになった。学生の学習には効果がみられるが、自分の身体に無理があった。レポートの確認や授業の準備をより効率的にできるように、TA などが付く必要がある。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 保育・教育課程総論 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教２年 | | | 受講者数 | 約 100 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | ☑ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☑ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 講義ですので、授業形態が限られていることと、しかも１年の半分の期間ですので、伝達したい知識内容の量がありますので、授業時間によって制約がかけられている印象があります。つまり学生と教員との双方向のコミュニケーションをとるための、時間的な余裕がありません。したがいまして、毎授業のおわりに、当該教育内容についてのレポート課題を提出してもらうことにしています。それによって授業内発言の制約分を補償することがある程度可能になるとともに、学生の理解度を把握しています。 | | | | |
| 取組みの効果 | 双方向での意見交換をすることが叶わなかったことを補填ですることが可能です。その中の意見の一部を授業内容にも転化・反映することができました。さらに一部学生が、理解に誤謬がみられたときの修正にも役立ちました。 | | | | |
| 今後の課題 | 授業内レポートは、定期試験に対しての補完的役割としても導入していますが、一部にとどまって、充分には機能していないところがあります。つまり前者は、専門用語等を理解して記述することを目的としていて、後者は記憶を再生することによる理解度の評価することになるのですが、とくに後者は時間的制限等があります。その後者の短所、すなわち記憶の再生が苦手な者を、前者で補おうと考えたわけです。しかしながら近年の学生たちをみますと、おおよそどちらもできる学生と、どちらもできない学生となっているところがあって、評価が明確にでてしまうところがあります。それを良しとするかは検討中です。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教育課程総論（小） | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教２年 | | 受講者数 | 約 130 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み<br>☐ 意欲・関心を高める取組み<br>☑ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 人数の多い大規模クラスの授業であるが、学生の発言と授業への参加を促すために、授業中にいくつかの質問を投げかけ、学生を指名、もしくは学生にマイクを向けて答えてもらう。初回の授業時にそうした方法を採り入れることを伝え、その際に「わかりません。」は答えとして認めないことを全員で確認している。指名した学生、もしくはマイクを向けた学生が答えると授業への参加の実績として記録し、学期末の成績評価の際のプラス材料とする。平均およそ５、６人の学生が答えを求められる。なお、クラス人数が多く、１５回の授業で全員にまんべんなく答えてもらうことは不可能なので、ときおりボランティアで答えてくれる人を募る。この方法では、マイクを携えて机間巡視することになるので、授業を受けている学生の様子を知ることもできる。 | | | | |
| 取組みの効果 | 大規模クラスの大教室では、熱心な学生は前方の席に座り、あまり熱心でない学生は後方の席に座る傾向があるようだが、あえて後方座席の学生にマイクを向けるなどにより、適度に緊張感を与えることができる。熱心に授業を聞いている学生には好評だが、あまり熱心でない学生の場合、授業担当者の質問を聞いていないこともあり、質問を繰り返したり、答えを考えてもらったり、実際に答えてもらうのに時間を取られるのも事実である。学生に「なぜ？」という疑問について考えてもらうのと、一人の学生の答えをみんなで共有するのには適した方法であると考えているが、この取り組みの効果の程はよく分からない。以前の授業アンケートでこの取り組みはよい、との自由記述があったが、成功事例とも失敗事例とも言えない。 | | | | |
| 今後の課題 | この取り組みが成功するには、授業担当者が学生に投げかける質問が明確で、分かりやすいだけでなく、学生の思考の深まりを誘発するようなインパクトのある質問でなければならない。そうした「研ぎ澄まされた」質問をいくつも準備するには、授業準備にいっそう時間をかけることが必要であろう。また、質問を投げかけ、答えてもらう、というやりとりだけでなく、それを書き留めるなり、それに関わった問いについてショートエッセイを書くなりして、思考を持続させることができればよいと思う。そうした仕掛けをつくり、それを実際に機能させるには、授業担当者が学生のショートエッセイに目を通す時間的余裕がもてるなど、教員が教育活動によりいっそう専念できるように、しっかりとした教育支援態勢を考えていただく以外にないと思う。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 子どもの保健ⅠA | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教３年 | | | 受講者数 | 約 100 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 毎回の講義終了前１０分を活用し、学生にミニレポートを記入してもらう。<br>ミニレポートの項目は、①本講義のキーワードを３から４つ、②学んだことや感想、③質問やわからなかったこと、④その他。　初回授業では学生に「ミニレポートは１０分以内に記入し、特に①、③を優先的に記入する。テキストや資料は見ないようにし、あなたのことばで書いてください。」と説明する。<br>レポートの用紙は、A3 裏表の１枚に１５回の講義のレポートを継続的に記入できるようにしている。毎回の講義終了後はミニレポートを回収し、必要があれば、コメントを記入する。次回授業では質問に答え、また理解していないところを再度説明している。 | | | | |
| 取組みの効果 | 学生は意欲的に講義に参加している。毎時間にミニレポートを提出することによって短時間で自分が学んだことや気持ちをまとめることができてくるようになる。また、１５回の講義のミニレポートを１枚の紙に記録することで、学生は自ら学んだことを振り返りやすいようで、自らの記録が上達したことを実感できるようだ。教員としては、毎回の講義で学生の理解度がわかり、学生の個別の気持ちがわかりやすくなった。さらに、毎回の講義目的の到達度がわかり、自らの講義の改善につながっている。この講義は、「子どもの保健ⅠA」からはじまり、「子どもの保健ⅠB」、「子どもの保健Ⅱ」があり、１年半にわたり、継続し学生は受講している。そのため担当教員は非常勤講師も含め複数教員で担当している。複数の科目担当教員は前期後期の年２回ほど打ち合わせを行なっているが、その時にも共通の認識でシラバス作成や授業改善を行うことができるようになった。 | | | | |
| 今後の課題 | できれば、５０人以下クラスで講義ができたら、さらによりよい講義になるのではないかと考える。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 家庭支援論 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教３年 | | 受講者数 | 約 100 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | ☑ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☑ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 講義ですので、授業形態が限られていることと、しかも１年の半分の期間ですので、伝達したい知識内容の量がありますので、授業時間によって制約がかけられている印象があります。つまり学生と教員との双方向のコミュニケーションをとるための、時間的な余裕がありません。したがいまして、毎授業のおわりに、当該教育内容についてのレポート課題を提出してもらうことにしています。それによって授業内発言の制約分を補償することがある程度可能になるとともに、学生の理解度が把握できます。さらに授業の科目名が示すように、卒後の学生が、こども・保護者と子育て家庭への支援の実践者と赴くためにも、自己の家庭を理解することも必要と考え、定期試験に加え学期末の集大成としてのレポートも課しています。 | | | | |
| 取組みの効果 | 上記の方法論の導入によって、双方向での意見交換をすることが叶わなかったことを補填ですることが可能です。その中の意見の一部を授業内容にも転化・反映することができました。さらに一部学生が、理解に誤謬がみられたときの修正にも役立ちました。学期末レポートをこなすことによって、授業内容を、より理解してもらえた印象をもちました。学生にとっての負荷は大きいのですが、単位を取得できない学生が極めて少ないこととなっています。 | | | | |
| 今後の課題 | 上記の３評価について、効果がみられていますが、学生の負荷が大きいかもしれないので、その対策が必要かもしれません。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 教育行政学 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教３年 | | 受講者数 | 約 100 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 本授業は、３年次後期開講で、学生にとっては教育実習終了後の受講となる。教育実習の期間が、全体で±１週間ほどずれているので、授業の運営上、進度があわず、困っている（開講期を早めることになっている）。また、多くの履修学生は教育実習後の進路模索中であるため、教職教養の法制的な基礎知識を習得する動機が全体的に希薄であるように思われる。この傾向は、年々強まっている。そのような状況の中で、下記の工夫を試みた。<br><br>①教育法規を解説するにあたり、一般的な説明に留まらず、英文化して設問を設け、考えながら相互に理解を深める工夫を試みた。<br>②義務教育に係る視聴覚教材を活用して、グループでディスカッションを行い、代表者がプレゼンテーションする機会を設けた。このようなプロセスを踏まえて、個人レポートを作成させ、成績評価に 20 パーセント分、配点した。<br>③教職実践の構造性と機能性を踏まえた、教育行政及び教育法規・教育制度、学校経営等の位置づけを理解するための問題を作成し、学生が考えながら解答できるように工夫した。 | | | | |
| 取組みの効果 | ①については、教員志望の学生については好評であったが、教員を志望しない学生については、その目的を理解できない者も若干いた。<br>②については、多くの学生が関心を持って視聴することができた。しかし、グループ・ディスカッションでは、参加の度合いに差がみられた。また、公教育を支える教育実践そのものについての捉え方において、学習者中心主義に偏った個人主義的な価値観が強く、義務教育に係る普遍的な捉え方や他者とは異なる捉え方について正しく理解ができない者も多くいた。<br>③については、一応の理解は得られたが、もう一息内容に踏み込む必要あり。 | | | | |
| 今後の課題 | ⑴今後は教育実習後の進路確認を踏まえて、授業目的を分かり易く説明する。<br>⑵その上、教職実践力に係る制度的基礎知識として、教育法規を学ぶ必要性があり、教員採用試験でも教職教養として出題される領域であることを丁寧に説明する。<br>⑶教育実習の終了時点が異なるので、そのことを留意しつつ、授業の進度を調整する。<br>⑷従来にもまして、グループ・ディスカッションを踏まえて、意見交換を活発に行い、学生が多様な異見を受入れ、相互に理解を深める力を育みたい。<br>⑸３年次教育実習後の教職への意識が従来より薄らいでおり、11 月～翌年の７・８月までの指導方法を学科として再検討する必要性を感じている。<br>⑹３年次後期であるにもかかわらず、受講態度にかなり乱れが見られるので、「受講の心得」を作成し、徹底させたい。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 体育科指導法 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教４年 | | 受講者数 | 約 50 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | ☐ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | ☐ 発言を促す取組み | | | | |
| | ☐ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☐ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | ☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 取り組みの趣旨：学生は小学校から高等学校にかけて体育科の授業を、学習者として経験している。そのため、体育科の授業について一定の知識があり、形式上、指導案を作成し模擬授業を実施することができる。しかし、作成した指導案や実施した模擬授業の内容が適切であったかどうかは、体育科教育学の理論からとらえ直さなければ判断することはできない。そのため、体育科指導法の授業においては、体育科教育学の理論を、実際の授業と関連付けながら理解させる必要がある。<br><br>目的:講義で取り扱う、体育科教育の理論的背景としての「目標」「内容」「方法」「教師」「教材」「子ども」に関わる知識を理解させ、その知識をどのように指導案へ反映させるのかを理解させる。<br><br>方法:まず、実技をしながら教材研究を行わせ、体育科の指導案を作成させる。次に、指導案にしたがって模擬授業を実施させ、模擬授業の振り返りを行わせる。最後に、目的に示した体育科教育の理論を解説し、その内容が作成した指導案や実施した模擬授業に反映されていたかを考えさせる。また、反映されていない場合には、改善案を検討させる。 | | | | |
| 取組みの効果 | 本取り組みは、模擬授業を、体育科における教材研究の仕方や指導案の書き方、教授技術の修得を目的とするのではなく、体育科教育の理論的知識の理解を促すための手段とした点に特色がある。<br>本取り組みの効果として、体育科教育学の理論的知識の理解が促されたと考えられる。 | | | | |
| 今後の課題 | 教材研究や指導案の作成および模擬授業は、10 名程度の班ごとに実施している。教材研究については全員が主体的に参加することができるが、指導案の作成や模擬授業の授業者は特定の学生が行うことになる。したがって、学生の活動内容に差が生じていると予想される。この活動の差は、体育科教育の理論に基づいて指導案や模擬授業を検討する際の深まりの差につながると考えられる。<br>したがって、指導案作成と模擬授業に全員が主体的に参加できる方法と検討することが課題である。 | | | | |

| 授業形態 | 講義・演習 | 科目名 | 保育内容・指導法・<br>教育実習関連科目 | 必選区分 | 選択<br>(資格・免許必修) |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教 1～4 年 | | | 受講者数 | 約 40 ～ 60 名 |

| | |
|---|---|
| 最も力を入れた取り組みポイント | □ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☑ 発言を促す取組み<br>□ 時間外学習を促す取組み<br>□ 学習態度を良くする取組み<br>□ その他（　　） |
| どのような方法を取り入れたか | 幼児の姿や保育の方法をおさめた視聴覚教材やその映像に関連するペーパー資料を用いることにより、映像の意図するところ、すなわち保育における視点を学ぶことができるよう工夫した。また、こうした文字や映像で体験した学びを教育実習等での実際の子どもや保育を通して立体的な学びになるよう取り組んでいる。 |
| 取組みの効果 | 視聴覚教材の使用後、クラスで、文書または口頭で映像から見届けた具体的な学びを発表し合うことでまた、教育実習・保育実習等での体験を通した学びを報告し合うことで双方向での学習が成立している。さらに他の学生の意見を聞くことを通して子ども観や保育の視点の多様性について経験しているようである。 |
| 今後の課題 | 失敗談として、本フォーマット「科目名」に記したようにこの取り組みは様々な科目にわたり実施している。開講学年・学期が変更されたり、担当科目が変更したり、実習の事前・事後開講設置時期変更があれば、厳密に調整しなければ、脱落・重複等の発生は容易である。また、学生たちは同じことを同じ形で二度聴くとなると「それ以前も同じこと聞いた。」と 2、3 年前の内容を鮮明に覚えているかのごとく失望の声となる。恐ろしい事態である。毎回授業後内容を簡単に手帳に残すことで凌いでいる。 |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教育演習 | 必選区分 | 必修 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教３年 | | 受講者数 | 約 10 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☑ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 本講座では、アクティブラーニング（学習者中心型授業方法）を取り入れている。本講座では、この方法を採用し、学習者間の積極的な相互交流を推進することと授業内容に対する興味、関心を高めていくことをねらいとしている。1 授業における活動は、基本的に以下のフォーマットにそって行われる。　1）本時のトピックへの関心を高めるグループディスカッションと各グループの発表、質疑応答（主に S-S)　2）本時の学習課題に関連するレクチャーと質疑応答（主に T-S)　3）　学習課題に関するワークシート記入（個人作業）4）ワークシートの内容に関するメインディスカッション（S-S)　5）各グループの発表（１０分）6）意見交換またはディベート　※ S －受講者、T －担当者 | | | | |
| 取組みの効果 | 上記の方法の導入により、受講者は各授業において意欲的に取り組み、本講座のテーマに関して興味と関心を高めている様子が見られる。また､ディスカッション活動は、受講者間の相互交流を深め、授業内でのよりよい人間関係づくりの発展に効果があると考える。 | | | | |
| 今後の課題 | 学習者中心型授業の導入により上記の効果が認められるが、最終的な意見交換においては、担当者が期待する積極性と発言の深まりはまだ十分であるとはいえない。そのため、まだ発展的なディベート活動にはいたっていない。グループディスカッションでの個々の発言を促すとともに、受講者がグループ間の意見交換をさらに積極的に行い、内容を深めるよう今後も支援していきたい。その結果が効果的なディベートの発展につながると考える。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 卒業研究 | 必選区分 | 必修 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教４年 | | 受講者数 | 約 10 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み | | | | |
| | ☐ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | ☑ 発言を促す取組み | | | | |
| | ☑ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☐ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | ☑ その他（ ICT tools ） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | In the final semester of the English Communication and Cultural Literacy seminar, the methods of teaching include students actively applying their research skills to write their senior thesis, communicating about their topics with students in another prefecture, and using many ICT tools to reflect on the cultural knowledge and communicative insights that they acquired in this class.<br><br>The active learning in this class was connected the students' understanding of the social, cultural, and linguistic forces that shape attitudes, beliefs, and choices about human interactions. Students discussed the meaning of hidden culture, diversity and stereotypes and gained a deeper understanding of the underlying values that are deeply rooted in contextualized interactions.<br>The ICT tools that were used in this class include online communication tools such as, Google documents on Google drive, LINE, Skype and uploading students' interviews on YouTube and Blogspot. | | | | |
| 取組みの効果 | It is very challenging for Education department students to write their senior thesis in English. The success of these students was a direct result of their motivation to work hard in class as they wrote about their research findings, expressed their opinions and added their research survey findings to their support their conclusions. The steps of researching about their topic in a second language took a lot of time as students had to read and understand the main ideas and vocabulary first. The process of editing and revising the thesis paper also requires a lot of time and personal effort to communicate clearly about results. Due to the support of their cohorts in another university, the MWU students had authentic reasons to communicate in English through ICT. The technology skills that students used during this project directly increased their confidence to use other online tech tools. | | | | |
| 今後の課題 | In future classes, I will continue to use ICT tools to help students communicate through technology applications and other means of social media, which is essential in this increasingly globalized world. The challenge of staying updated concerning new technology tools is important for both students and myself. At MWU, I want to use my experience to contribute to the international ties that we are forming as I apply what I have taught and learned in future classes. | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | ICT の活用 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教 1 年 | | 受講者数 | 約 40 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | この科目では、すべての課題を最初の授業時に提示している。<br>各授業では、基本的な操作以外、教師は説明をしない。<br>テキストには同じ課題の作成手順が詳細に示されているが、敢えて MM 館にあるソフト（Word,Excel,PowerPoint) とバージョンが異なるものを使用している。<br>授業中にスマホやパソコンで操作方法などをネット検索することを許している。また、学生どうしで教え合うことも許可している。 | | | | |
| 取組みの効果 | テキストの手順通りに操作するだけでは、課題の制作ができず、ネット検索をして解決したり、先に課題を完成した学生が他の学生に教える場面も多く作ることができた。これにより単にテキスト通りの操作をするだけではなく、自分で考えたり操作方法を探したりする力が付いたと思われる。 | | | | |
| 今後の課題 | 教師の介入方法（時期）が難しい。課題制作が遅れている学生には操作方法を教えたりするが、考えることをすぐにあきらめる学生や友達に聞いてばかりいる学生にどうやって考えさせる時間を作るかが課題である。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教科図画工作 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教１年 | | 受講者数 | 約 50 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | □ 理解を深める取組み<br>□ 意欲・関心を高める取組み<br>□ 発言を促す取組み<br>□ 時間外学習を促す取組み<br>□ 学習態度を良くする取組み<br>☑ その他（最新情報を速やかに反映させる／高画質の画像、動画をできるだけ多く提示） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 造形表現の本質をリアルに感じてもらうために、フルハイビジョンの高画質プロジェクター（理想は４Ｋ画質以上･･･）を用いた教材を多く用意している。学生作品の鑑賞・講評・ディスカッションにも大いに活用している。また教員自らが取材した最新作品もできるだけ紹介し、講義そして作品制作につなげようとしている。教室のコンセプトそのものが「最良の鑑賞環境と創作環境の融合」でもあり、バーチャルとはいえ現実に迫る画質で鑑賞し、その新鮮なイメージを保ったまま創作活動にあたることができる。授業進捗状況に合わせて随時この２点を往来できることのメリットは大きい。 | | | | |
| 取組みの効果 | 良くも悪くもデジタルの画面を見つめて情報を得ることに慣れているせいもあって、言葉や図では理解に時間がかかる複雑な内容も、＜鑑賞＞＜講義＞＜制作＞を横断的に動くことで楽しみながら理解を深めているといえる。それは、提出された作品から見てとれる。 | | | | |
| 今後の課題 | 作品制作における各自の視点を尊重しようとすると、90 分授業を２回連続で行うような手法に思い至る。大学全体の枠組みの中での工夫は凝らしているつもりだが、やはり実技（実制作）が過半数である授業が、毎回 90 分で終わってしまうことが足かせとなってもいる。やむを得ず、実際の作品制作・仕上げは宿題として期限を設けて提出としているが、本来は教室で時間内にじっくりと制作指導を尽くしたいところ。学校教育館竣工にあたり、既存の高画質プロジェクターに加えて電子黒板の常設併用も希望していたが叶わなかった。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 保育内容・表現Ⅰ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教２年 | | 受講者数 | 約 50 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 授業に対する学生の理解度を確認する方法として、フィードバックシートを利用しています。授業の共同担当の先生に教えてもらったものを参考に、様式を作りました。授業の最後に記入し学生の多くは実技演習の記録や振り返りの記録として活用しています。出席・遅刻・早退など、出席状況も記録するので、最後の出席調査にも大いに活用しています。感想や質問があれば次に紹介するようにしています。 | | | | |
| 取組みの効果 | 様式は A5 版で、約 5 分程度で記入できるよう感想欄は小さ目にしています。学んだ内容のキーワードや率直な感想が記入されており、学生からも量が多くないので書きやすいとコメントをもらっています。<br>演習の学生の満足度が感じ取れるので、次回授業の際、演習課題の選択に活かしています。 | | | | |
| 今後の課題 | 学生の受講の記録としては有効ですが、一人ずつの記録に対して、コメントをすることが難しく、せっかく書いてくれた学生のコメントに対して丁寧にコメントしていくことが課題です。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教科理科Ⅱ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教２年 | | 受講者数 | 約 60 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☑ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | （授業時間内）<br>ペットボトル、魚の形をした小さな醤油さし、ナットを用いて、学生一人ひとりに浮沈子を作成させた。しばらくの間、自由に遊ばせてから、浮沈子が浮いたり沈んだりする理由を考えさせた。学生と議論をしたり、ペットボトルの中の浮沈子を観察させたりしながら、浮沈子が浮き沈みする理由を解説した。<br><br>（授業時間外）<br>完成した浮沈子を解体して、家に持って帰らせ、次の三つの課題を与えた。<br>1　もう一度浮沈子を家で作り、浮き沈みしているところを写真に撮り、提出する。<br>2　浮沈子が浮いたり沈んだりする理由をできるだけ分かりやすく、自分の友人や保護者などに説明する。<br>3　説明が分かりやすかったかどうかを説明した相手に評価してもらい、評価の結果を提出 | | | | |
| 取組みの効果 | 学生は興味をもって浮沈子の作成に取り組み、意欲的に取り組んだ。浮沈子が浮き沈みする理由については、最初は理解する事が難しかったようであるが、それまでに学習した「空気は圧縮が可能だが、水は難しい事」や「水に浮く事と比重の関係」などと目の前の現象が次第に結びついていき、学習した内容が実物と容易に結びついて理解できるようになった。<br>授業時間外の課題は全員が意欲的に取り組み、次週には殆ど全員が提出した。 | | | | |
| 今後の課題 | 授業時間外で行った「浮沈子が浮き沈みする理由の説明」にはやや問題が見られた。「分かりやすかった」と評価されてはいるものの、やや不十分な説明や不正確な説明も混在していた。科学的に正しい説明であるかどうかをチェックする手立ても必要であると感じた。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教科器楽Ⅱ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教２年 | | 受講者数 | 約 45 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 教科器楽Ⅱは、弾き歌いの技能を習得する科目である。これまでのピアノ独奏による演奏とは異なり、歌が伴うため、演奏が非常にむずかしくなる。弾き歌いであるからには、歌が主体となるべきであるが、学生はピアノに集中し、歌がおろそかになってしまう傾向にある。そこで、従来は歌の練習をしてからピアノ伴奏の練習を行っていたが、そうするとますますピアノに集中するので、練習順序を逆にしてみた。まず、ピアノ伴奏をある程度練習しておくのである。それによって、多少ともピアノに余裕ができ、その分、歌に集中することができると考えたからである。そして、弾き歌いにおいては、いかに歌が重要であるかを認識してもらうためでもあった。学生は、歌は歌えていると錯覚していたり、この程度でいいだろうと、低いレベルの歌唱に甘んじており、ピアノはどうしても弾かねばならぬという観念が強かったりする。これでは、いつまでたっても弾き歌いの技能は習得できない。このような、至極単純な練習方法の入れ替えではあるが、学生の意識が変わることを期待して、試してみたのである。 | | | | |
| 取組みの効果 | 効果としては、若干、ピアノ伴奏に余裕ができたこともあって、歌の技量が向上したと感じられた。しかし、学生は、どうしてもピアノが弾けないことには納得がいかないらしく、依然として集中度はピアノの方が高いのが実情である。つまり、歌は付け足しになって、弾き歌いの科目であるにもかかわらず、本末転倒になってしまう。歌唱とピアノの練習順序を入れ替えたことは無駄ではなかったが、大きな効果が得られたとは言い難い。 | | | | |
| 今後の課題 | 弾き歌いは、ピアノが主体ではなく、歌が主体であることを、これからも気長に学生が認識するよう指導を続けていかなければならない。今年度から、科目名が「教科器楽Ⅱ」から「伴奏法と弾き歌い」に改称されたこともあり、よりいっそう歌の重要度を高める転換点となることに期待をしている。弾き歌いで歌がいい加減にになれば、こどもたちへの指導にも支障をきたすことを、学生が理解してくれることを念頭に、努めていきたい。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 保育・教育相談支援 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教３年 | | 受講者数 | 約 40 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み<br>☐ 意欲・関心を高める取組み<br>☑ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☑ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | この授業は、子どもや保護者との相談技術を身に着けることを目的としている。<br>（1）グループ活動の運営方法<br>・毎回、くじ引きにより、グループを作る。<br>・ジャンケンにより、グループリーダーを決め、グループ活動の司会等を任せる。<br>（2）ロールプレイの運営方法<br>・ロールプレイの目的をかなりていねいに伝える（むしろ失敗して、そのときの心の動きを見つめてほしいこと、「どう対処するべきか」の答えは、皆の心の中にあって、マニュアルではないこと、お互いに感じたことをフィードバックしあい、切磋琢磨することなど）。<br>・グループ活動にゲーム感覚の面白味を持たせるため、登場人物の背景等を記述したカードを配布し、これに基づいて、ロールプレイの役作りを促す。<br>（3）ワークシートへのフィードバック<br>学生から回収したワークシートにはコメント等をつけ、翌週、返却するとともに、優れたコメントをまとめたプリントを配布する。 | | | | |
| 取組みの効果 | 学生による授業アンケートによると、『授業のスタイルが新しかった。ロールプレイや話し合いは他の人の意見をきくことで、自分の考えもより深まった』をはじめとする高評価をもらっている。個々の取り組みについては、例えば、くじ引きによりグループをつくるので、私語もなく、多少の緊張感をもって活動が行えるようになった。また、リーダーを決めておくことで、学生が主体性と責任感をもって活動できるようになった。授業アンケートでも、『学生全員が取り組める授業である』とのコメントが多々見られた。また、ワークシートへのフィードバックを毎回ていねいに行うことにより、回を追うごとに、学生たちのコメントが内容の深いものになってきているのを感じている。 | | | | |
| 今後の課題 | グループワークがうまくいくかどうかは、教員の的確な指示と、学生に考えさせるべきポイントの明確化にかかっていると感じている。また、学生のワークシートに対するフィードバックについても、それをどのように取り上げ、皆の知識とし、深めていくかが大切であり、ここからが本当の授業かもしれないとも考えている。自分自身、マンネリ化することなく、上記のことを考え続けていくのが課題である。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教科理科演習 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教３年 | | 受講者数 | 約 110 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | □ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>□ 発言を促す取組み<br>☑ 時間外学習を促す取組み<br>□ 学習態度を良くする取組み<br>□ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 学生のレポートを集めた実験解説集「理科実験ネタ＆コツ」を毎年、発刊している。理科の学習指導要領の内容に基づきながら、児童の発達段階を考慮し、興味・関心を高める実験やものづくりのアイディアをＡ４で１枚の原稿をレポートとして作成させている。<br>内容は、「難易度」、「準備時間・実施時間」、「ねらい」、「準備物」、「実験のしかたとコツ」、「安全への配慮事項」、「さらに学びを深めるための資料（文献やＨＰ等）」から構成されており、若手の教員や理科が苦手な教員も短時間で実施できる実験の手引き書の内容となっている。<br>学生は実験の演示の前にレポートを作成し、そのレポートに沿って発表を行う。児童役の学生の反応をもとに、説明が不足している内容や正確でない内容を加筆修正してレポートを再提出する。出されたレポートは、グループで読み合い、内容の適切さを検討する。最終的に提出されたレポートを教員が科学の視点から吟味する。<br>実験の演示、レポート提出が終わったら、「私の教材開発物語」として、教材開発の過程を振り返り、レポートを作成させている。 | | | | |
| 取組みの効果 | 実験をめぐって学生同士の話し合いも活発になり、双方向の授業が成立している。昨年度で４年目となったが、毎年学生の要望に合わせて、実験の手順だけでなく、実験を取り入れた授業場面のシナリオや理科の時間で使える科学読み物、絵本の紹介ページも作成している。１人で１実験を、実験材料の調達から演示、Ａ４で２枚の実験の手順とシナリオを作成することは、授業時間外の学習が必要となる。この一連の過程は、教員が教材開発を行い、授業を実施する流れとなっているので学びも大きい。実験の演示後、科学的な説明だけでなく児童の反応やつまずきを教員の経験を踏まえて説明するために授業のより具体的なイメージを持つことができるという感想が多い。 | | | | |
| 今後の課題 | 実験解説集「理科実験ネタ＆コツ」は、一昨年度 180 ページに達したために、学生から事前に集金した額（500 円）では、足りず研究費から一部支出した。理科の実験では、水溶液の呈色反応や燃焼での炎色反応などカラーページの方が学習効果が高いものも多い。現在は、白黒ページであるので、カラーページにすると学生の負担が大きくなることが課題である。３年後期の本授業は、履修希望者が多く、２クラスに分けて開講している。それでも 60 人近くの人数で個別の実験を行うので、安全に配慮しながら実施することが課題である。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教職実践演習 ( 小 ) A | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教４年 | | 受講者数 | 約 50 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | ☑ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | ☑ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | ☑ その他（ともに学びあい・ともに育みあい・ともに高めあう教職実践力の育成） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 本演習科目は、卒業学年次開講の小学校教職課程の総括的科目であり、教職必修です。この点に留意し、以下の方法を取り入れました。 ①授業内容については、(1)4つの教職実践演習の構成原理に即して、探求ノートを独自に開発し、毎時の演習課題を明示した。加えて、(2) 本授業受講に際しての事前確認事項を設定し、３年次後期までの本学での学びにつき、履修カルテなどを参照しつつ総合的に自己点検する探求ノートを開発し、活用した。(3) 演習課題への取り組み過程を段階的に構成し、４つのスモールステップを順にクリアーすることで、最終的に演習課題に到達できる工夫を、探求ノートに施した。 (4) 授業時間内に完成できなかった課題については、授業外学習として１～２時間の宿題と課した。 (5) 欠席者に対しては、グループメンバーからの情報提供を促し、「ともに学び・ともに育みあう」関係性を育んだ。また、μキャン学習支援システムを活用して、探求ノートをアップした ( 平成 27 年度より )。 ②授業方法としては、上記４つの演習課題に応じて、(1) グループ･ディスカッション (2) プレゼンテーション (3) ロールプレイ (4) 模擬授業等を適宜採用して、授業を進行させた。グループ編制に際しては、学生間の効果的コミュニケーション・スケールを考慮して、１班４名程度とした。発表の際には、ホワイトボードにグループの意見をまとめ、チームとして学習の成果を発表させ、これを踏まえて、ディスカッションを試みた。 ③評価方法としては、上記５つの探求ノートの記載状況を踏まえ、各 20 点計 100 点満点で評価を行った。評価者は、該当の授業クラスの担当者とした。 | | | | |
| 取組みの効果 | ①４年次前期は、教職課程履修の学生にとっては、教員採用試験出願の直前であり、精神的に不安定であり、迷える季節である。このような学生たちに対して、正面から、教職志望の目的意識や動機、志望動機・出願理由などを確認する作業は、極めて「しんどい」課題となっている。しかし、このような学生たちが直面する課題について、個人で対応するより、むしろ志を同じくするクラスメートとともに学び・ともに育みあい･高めあうことは、極めて意義あることと考える。実際、授業アンケート調査では、そのような意義について認識している学生は多い。②教職課程履修者のうち、明確に教職志望を確定できている履修者にとっては、効果的であっても、一方、一般企業等への就職を希望している学生にとっては、かなり受講し辛い授業内容・方法となっているので、そのような意味においては、効果は少ないといえる。③とはいうものの、教員志望の学生にとっては、①以外にも、願書作成・面接・論作文・模擬授業等々の教員採用試験対策として基礎的準備となっていることは、事実である。④探求ノートPART1・2・3・4・5 については、各担当者が、添削・採点の上、返却するよう努めている。 | | | | |
| 今後の課題 | ①この２年間の探求ノートを活用した教職実践演習の授業スタイルについては、ほぼ骨格を形成することができた。特に、教員志望の学生については、４年次前期は出願の時期でもあり、さらには教員採用試験へ向けての準備を加速させる時期でもある。従って、このような学生のために、さらに効果的な工夫を重ね、より効果を高めたい。②しかし、教員志望ではない学生にとっては、この授業は苦渋に満ちた時間となっている。この点をどのように改善するか、検討を重ねたい。③総体的に、受講者の一般的傾向として、個人レベルでの会話は活発であるが、集団レベルでの発言力に乏しいところがある。また、個人→小集団での意見交換を踏まえた、論作文課題の記述力についても、弱さを感じる。この傾向の背後に何があるのか、検討を重ねたい。単なるコミュニケーション力や文章表現力の欠落といった技術的な問題に留まらず、この時点での自信のなさの背後には、学生たち自身の成育歴における対話・コミュニケーションの不足、自我形成上の基本的課題が潜んでるように仮説される。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教職実践演習 ( 小 )B | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 大教 4 年 | | 受講者数 | 約 50 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | ☑ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | ☑ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | ☑ その他（教育委員会と連携した授業実践の試み ） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 本演習科目は、4 年次前期開講の「教職実践演習 ( 小 ) A」と内容的に連続する、教職必修科目です。4 年次後期は、受講者の進路先についてもほぼ確定しつつある状況にあり、来春の教職生活を意識しての前倒し研修的な意味合いを込めている。 ①前期 A の場合の授業内容特性 (1)(2)(3)(4)(5)（前頁参照）に加えて、大阪府・大阪市・神戸市・西宮市の教育委員会との連携を踏まえ、ゲスト・ティーチャーより話題提供していただいている。この話題提供を参照しつつ、さらに授業担当教員がクラスごとに、フォローアップ的授業、あるいは発展的授業を試みている。 ②授業方法としては、A と同様に、(1) グループ･ディスカッション (2) プレゼンテーション (3) ロールプレイ (4) 模擬授業等を適宜採用して、授業を進行させている。グループ発表の際には、ホワイト・ボードにグループの意見をまとめ、チームとして学習の成果を発表させ、これを踏まえてディスカッションを試みている。 ③評価方法としては、探求ノートの記載状況を踏まえ、100 点満点で評価を行う。評価者は、該当の授業クラスの担当者である。 ④ A と異なる点は、一点目は教育委員会との連携を踏まえたゲスト・ティーチャーによる話題提供を参照しつつ、授業を構成している点である。二点目は、教育研究会で、教職実践演習での学びについて、学生から発表する機会を設けている点である。本科目は、教職課程の総括的科目であるので、教育研究会での発表は、4 年間の学びの最終的なまとめを表現する機会としている。 | | | | |
| 取組みの効果 | ① 4 年次後期は、前期と異なり、受講者の進路先がほぼ確定しつつある状況にある。(a) 教職志望の学生にとっては､結果如何に係らず､来春からの生活をイメージしつつ、授業に積極的に取り組むことができた。そのような意味で､取組みの効果については、肯定的といえよう。 実際にそのような学生は、出席率も良好で、発言頻度や教育研究会での発表意欲も高い。 しかし、（ｂ）教員志望の学生以外については、専門性が具体的になるので関心及び参加の意欲の程度は低い傾向にある。 ②そのような学生についても、グループで line 等により、授業内容を伝えあい、ノート作成のための基礎情報を共有し、相互に学びを支える関係性をともに育むよう、指導している。将来への志は異なっていても、本学においてともに学びあう仲間として、相互に学びあい・育みあう力を学生たちが主体的に育むことを願っている。 | | | | |
| 今後の課題 | 前期開講の「教職実践演習 A」の課題①②③に加えて、後期固有の課題について、列記する。 ④後期に至っては、受講者の状況は以下のパターンに分類される。(a) 教員採用試験二次合格者 (b) 同じく一次合格者 (c) 同じく一次不合格者 (d) 同じく未受験者などである。従って、受講者 (a)(b) については、かなり前向きの指導が可能であり、課題意識も高い。受講者 (b)(c) については、個別的な卒業後の進路を想定しつつ、授業内容を構成したり、指導を行う必要があろう。例えば、非常勤講師・大学院進学等々の情報提供も行いたい。⑤授業内容の構成についても、ゲスト・ティーチャーからの情報提供を活かした探求課題の設定が可能となることを願っている。そのためにも、探求ノートの構成についてさらなる検討を重ねたい。⑥上記⑤とも連動するが、課題設定の方法を工夫することにより、卒業研究やテーマごとの探求とつながりつつ、より一層深化するようにしたい。そのため、授業担当者と協議の上、教育研究会等での研究発表を充実・拡大したい。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 初期演習 | 必選区分 | 必修 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教１年 | | 受講者数 | 約 40 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み<br>□ 意欲・関心を高める取組み<br>☑ 発言を促す取組み<br>□ 時間外学習を促す取組み<br>□ 学習態度を良くする取組み<br>□ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 朝日新聞生活面で５週連載された「幼児教育」のコピーを配布し、グループで音読する。<br>各自で黙読し、「なるほど」と思った箇所、疑問に思った箇所を選び、なぜそう思ったのかもメモする。<br>グループで意見交換の後、クラス全体でディスカッションする。<br>「幼児教育」で取り上げられている幼児教育のありかたに共通点があるとすれば何であると思うかについて簡単なレポート提出（課題として）。 | | | | |
| 取組みの効果 | 幼稚園・保育士を目指す学生たちが関心を持つようにと、幼児教育に関連する新聞記事を教材に使ったことで、学生たちが記事を読んで意見を交換する取り組みは積極的だったと思う。やはり自分の専門、関心のある分野を教材にするとモチベーションもあがるのだということがわかった。 | | | | |
| 今後の課題 | ５週連載分と最後の「反響編」とコピーを一度に配布して行ったので、消化不良を起こした感がある。時間の関係で授業１～２回分しか取れなかったのだが、学生たちの読み取る早さや表現をまとめる要領に問題があり、一気に読み込むのに無理があったようだ。学生たちがじっくり読み、考えをまとめられる時間が取れるように配慮する必要があると感じた。 | | | | |

| 授業形態 | 講義 | 科目名 | 家庭支援論 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教２年 | | 受講者数 | 約 80 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | ☑ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | ☑ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 講義ですので、授業形態が限られていることと、しかも１年の半分の期間ですので、伝達したい知識内容の量がありますので、授業時間によって制約がかけられている印象があります。つまり学生と教員との双方向のコミュニケーションをとるための、時間的な余裕がありません。したがいまして、毎授業のおわりに、当該教育内容についてのレポート課題を提出してもらうことにしています。それによって授業内発言の制約分を補償することがある程度可能になるとともに、学生の理解度が把握できます。さらに授業の科目名が示すように、卒後の学生が、こども・保護者と子育て家庭への支援の実践者と赴くためにも、自己の家庭を理解することも必要と考え、定期試験に加え学期末の集大成としてのレポートも課しています。 | | | | |
| 取組みの効果 | 上記の方法論の導入によって、双方向での意見交換をすることが叶わなかったことを補填ですることが可能です。その中の意見の一部を授業内容にも転化・反映することができました。さらに一部学生が、理解に誤謬がみられたときの修正にも役立ちました。学期末レポートをこなすことによって、授業内容を、より理解してもらえた印象をもちました。学生にとっての負荷は大きいのですが、単位を取得できない学生が極めて少ないこととなっています。 | | | | |
| 今後の課題 | 上記の３評価について、効果がみられていますが、学生の負荷が大きいかもしれないので、その対策が必要かもしれません。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 保育内容・言葉 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教 1 年 | | | 受講者数 | 約 40 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 保育内容・言葉では、講義形式で乳幼児期の言葉の発達や、領域「言葉」の内容や指導法について学ぶ科目である。この授業では、知識としての学びにとどまらず、知識として学んだ内容を同授業内に体験してみることを通して、授業内容に対する理解を深めたり、自ら課題を見出したり工夫して、知識・技能の向上を図る工夫を取り入れた。例えば、「ことば遊び」を取り上げた授業において、前半で知識として「ことば遊び」に関する知識を与え、その後、体験を通して、「ことば遊び」の持つ特性を感じ、指導上、工夫や配慮が必要な点についての気づきを促している。 | | | | |
| 取組みの効果 | 体験的な学びの部分では、まず担当教員が保育者役として「ことば遊び」を進め、学生は乳幼児役として遊びの楽しさを体験する。その後、学生に保育者役も経験させることで、保育者側・乳幼児側の両方の視点から「ことば遊び」を見ることが出来た点は、学生の理解を深め、意欲･関心を高める取り組みとして成功した。しかしながら、通常の教室での実施であったため、乳幼児になりきった約 40 人の学生が本気で遊びを体験したため、通常の授業では起こり得ない盛り上がりとなり、周囲の教室で授業をされている先生方や学生の皆さんには、迷惑をかけたのではないかと思われる。 | | | | |
| 今後の課題 | 保育内容・言葉では、学生が実際に「ことば」を用いて体験的に学ぶ機会が多い科目である。そのため周囲の教室への配慮は必要不可欠であると考える。できるだけ、声を出しても周囲に迷惑のかからない教室選びが必要となる。また、一クラス全員を同時に子ども役にするのではなく、子ども役以外に、観察にまわる学生を設けるなどの役割分担をすることで、全体として発せられるボリュームを抑える工夫も今後していきたい。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 保育内容総論 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教 1 年 | | 受講者数 | 約 70 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 〈1 クラス 35 名による授業〉<br>・幼稚園や保育所における実践事例や映像を介した授業。<br>・各自の興味・関心に基づいた保育のテーマを一つ設定し、授業時間外に調べたり、レポートとしてまとめたりして、ポートフォリオを作成。<br>・少人数のグループで保育を構想し、その内容と展開方法をマップに表し、発表。 | | | | |
| 取組みの効果 | ・保育を創造的に構想することから、保育内容への理解を深めていくことを目指している。<br>・授業と時間外学習との関連において、学びを深めていくことを目指している。 | | | | |
| 今後の課題 | ・学びを深めていくディスカッションの在り方について学ぶ。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 乳児保育Ⅰ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教１年 | | 受講者数 | 約 50 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | □ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>□ 発言を促す取組み<br>□ 時間外学習を促す取組み<br>□ 学習態度を良くする取組み<br>□ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | ・乳児保育（0・1・2歳児の保育）において、遊びは重要である。その保育教材研究のために、様々な手作りおもちゃを作成した。その際に、個々人で保育教材を作成して終わるのではなく、ワークシートを使用して理解を深めるとともに、他の受講生の工夫にも気付けるようにした。ワークシートの内容は、①保育教材を保育でどのように使用するのか、②子どもは何を楽しむと思うか、さらに、③他の受講生の保育教材を見たり、手に取ったり、説明を受けたりした上での気付き、である。 | | | | |
| 取組みの効果 | ・授業アンケートでは、「様々な教材研究ができる点」「十分に教材研究の時間を用意している点」「子どもたちにも簡単に作ることができそうな製作物の作り方を知ることができて良かった。作る上で子どもたちには何が難しいのかを考えながら作業することができた」「クラスの子のアイデアがたくさん見れて勉強になります」と肯定的な評価を得た。<br>・保育教材を評価し合うことで受講生同士のやりとりが活発になったと考えられる。 | | | | |
| 今後の課題 | ・保育教材を作成した上で、子ども理解や保育の展開の理解を深めるようにしてきたいと考えている。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教科体育 | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教１年 | | 受講者数 | 約 40 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み<br>☐ 意欲・関心を高める取組み<br>☑ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 毎時間授業終了時刻の１５分前に実技を終え、片付けと同時に授業記録用紙を配布し、毎時間の授業内容と気づきを書きとめて、提出後解散とした。その次の授業でクラス全体で共有すべき意見を取り上げて、学生たちにフィードバックした。提出された用紙は、最後にまとめて表紙をつけて授業記録として返却し、その内容を振りかえりながら記載可能なレポート課題を課した。 | | | | |
| 取組みの効果 | 回を重ねるごとに、気づきが深まっていることを記述内容から感じることができたのと同時に、フィードバックの際に知るクラスメートの意見に感銘を受ける様子などが伺えた。 | | | | |
| 今後の課題 | 年々、学生自身の体力のなさやからだの脆さを指導中実感することがある。記述時間をより短くしてできるだけ授業内での実働時間を増やしたい気持ちと、教科体育としてただ実技をするだけでなくそこから学び気づきを深める必要もあることから、時間配分をどう工夫していくかが、常に課題となっている。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 教科器楽Ⅰ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教１年 | | 受講者数 | 約 20 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 幼児教育・保育の現場で必要とされるピアノの技術は「幼児の動きに合わせて止まらずに弾く」ことである。１人で演奏する練習に重点をおいていると技術的に難しい個所は遅くなったり間違えて弾き直したりとどうしても独りよがりな演奏になってしまう。そのようなことを解消し、大事な目的を達成する為に「演奏を絶対に止めない」ということを目標に、１つの曲を２人で演奏する連弾の授業を取り入れてみた。同じような技術レベルの学生をペアにして、１つの楽曲を右手と左手に分担して弾かせる。本来は１人で演奏する楽曲を２人で分担して弾くため、技術的にはかなり易しくなる。しかし一方が止まったり間違えたりすると、もう一方はその影響を受け、曲が続かず途中で終わってしまう可能性が高い。連弾に取り組むことにより、技術的な部分に神経を使わなくてもよい分止まらずに弾くというところに神経を使う練習に時間を割いた。 | | | | |
| 取組みの効果 | 学生には１人が止まったり間違えて演奏しても、ペアのもう１人はずっと弾き続けること、また間違えて止まった学生も音楽だけは聴き続けて入りやすい小節から演奏に参加することなど、とにかく演奏を止めないということを徹底させた。結果、適度な緊張感を感じながら音を聴き続けるという本来の音楽の楽しみ方を経験できたと思う。また一度連弾で頭に入った曲なので１人で弾く場合の読譜が楽になるという利点もあった。 | | | | |
| 今後の課題 | １つの楽曲を２人で分担して弾くため技術的に易しすぎると感じる学生もいた。レベルの高い学生には連弾用の曲を用いて、同じ目標で練習するのも良いと思った。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 保育の心理学Ⅱ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教２年 | | | 受講者数 | 約 40 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 前半 45 分は講義中心で、視聴覚教材も取り入れて、できるだけ実際の保育現場が想像できる内容を解説した。集中して聴講できる時間は 45 分が限度であると考えるからである。そして後半は、グループに分かれて、前半の内容に関連した課題について討論させ、最後にグループごとに全体での発表を行った。工夫した点としては、1. 課題の内容を現場で出会うであろう事例を中心にして、すでに 1 回目の保育実習を終えている実習生にわかりやすい内容にした。2. グループの編成を 6 名として、毎回ランダムにグループを組み替えた。最後の発表時間を考慮すると、4 グループ程度がいいのだが、そうするとグループが 10 名となってしまい、議論が全員に共有できない。4 人程度が最も議論が深められると思うが、それでは発表時間が足りなくなる。そのため、6 名で 6 から 7 グループという構成に落ち着いた。 | | | | |
| 取組みの効果 | 凡庸な教員が凡庸な授業をしているので、華々しい成功例も派手な失敗例もあげられない。その中で、少しでも手応えがあったこの例では、すでに保育実習を終えていること、『保育の心理学Ⅰ』という授業である程度の知識は持っていること、次年度から現場に立つという自覚があること、以上の 3 点によって、有意義な議論ができていて、また様々な現場体験を共有できている。しかし、以上の 3 点のどれが欠けてもうまくゆかず、また過年度の例では初めから受講態度に問題のある学生が数名おり、その学生が入ったグループではおざなりに議論するだけで、後は雑談をするなどの行動が目立ち、うまく議論ができなかったこともある。その場合には、グループ討論をやめて、個人で課題に取り組ませるなどの方法に変更した。 | | | | |
| 今後の課題 | 双方向でのこういった授業ができるのは 40 人が限度。さらに学生の質が低下するようであれば、30 人以下での授業でなければ、それに合わせた授業は展開できない。授業方法には直接関係はないが、学生の興味関心に合わせて授業を展開すると、その都度資料や参考書を緊急に入手する必要が出てくる。しかし、現在のように図書館に発注していたのでは、とうてい間に合わない。他大学では当然のようにできている立て替え払いによる図書の購入を今すぐにでも導入していただきたい。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 保育の心理学Ⅱ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教２年 | | 受講者数 | 約 40 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | □　理解を深める取組み<br>□　意欲・関心を高める取組み<br>☑　発言を促す取組み<br>□　時間外学習を促す取組み<br>□　学習態度を良くする取組み<br>□　その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 毎回、グループワークを取り入れた。内容によって、個人で課題に取り組んだ後、グループで発表し合い、議論し、代表者がクラス全体に向けて発表する。最後に再び個人で振り返るという手順を踏んだ。<br>例えば、「子どもを理解するとは」というテーマでは、個人で 10 個の異なる理解すべきことを書きだし、４人ないし５人のグループで、それらを分類整理し、図示する。代表１名が、クラス全員の前で、図を示しながら発表する。次の時間の最初で、担当者から、全体を俯瞰する図を提示し、概説した後、個人で「子どもを理解する時に大切にしたいこと」をミニレポートとして書き、グループで発表し合うという手順で進めた。<br>また、「保育実践から学ぶ」というテーマでは、DVD で２～４分程度の子どもの遊び場面を見て、各自が「子どもの様子から気づいたこと」「保育者として、どのような関わりをするか」を記述した後、グループで話し合い、代表が発表し、最後に各自が「グループでの話し合いや発表を終えて、あらたに気づいたことや感想」を記述するという手順を踏んだ。 | | | | |
| 取組みの効果 | 取り組んだポイントの「発言を促す取組み」に関しては、個人→グループでの発表とすることで、発表・発言しやすいようにし、グループの代表として発表する学生も固定化しないよう配慮することで、全体として学生の発言を促すことができたと考える。しかし、グループでの活動に意欲的に取り組めた学生は多いものの、テーマによってはあまり積極的ではない学生も見られたのも事実である。<br>発言はそれほどできなかったとしても、学生一人ひとりが、各テーマに対する理解を深め、保育者となった後の専門性への基礎を培えたのではないかと、取り組みの効果について客観的な効果測定は行ってはいないが、以上のようにとらえている。 | | | | |
| 今後の課題 | 1. グループメンバーを固定化しないようにする（平成 27 年度からは、毎回グループメンバーをかえる）。実際学生からの要望もあった。<br>2. 毎回のグループワークの課題を１つあるいは２つに絞り、学生に明確に伝わるようにする。担当者の意図が十分に伝わっておらず、戸惑う姿も幾人か見受けられた。授業経験を積む中で、学生にとってわかりやすい適切な例やアイデアを紹介できることと思う。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 子どもの食と栄養Ⅱ | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教２年 | | | 受講者数 | 約 40 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☐ 理解を深める取組み<br>☑ 意欲・関心を高める取組み<br>☐ 発言を促す取組み<br>☐ 時間外学習を促す取組み<br>☐ 学習態度を良くする取組み<br>☐ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | ①授業内に実験や簡単な調理実習を取り入れ、楽しみながら取り組めるようにした。<br>②実験や実習の前に、その実験や実習に関する調べ学習をさせた（班活動）<br>③実験や実習の後に、そのことに関連する「食育だより」を作成させた（保育士資格関連の科目であったため）。そのことで、より実験や実習についての知識が深まった。<br>④各班で作成された「食育だより」を印刷し、他のクラス分も合わせて配布した。 | | | | |
| 取組みの効果 | ①「子どもの食と栄養Ⅰ（前期）」で学んだ知識を更に深められることができた。<br>②学生らが自ら関心を持った内容について、深く調べることができ、それらを班ごとに発表させることで、別の班の調べ学習の内容を知ることができた。感想にも、大変有意義であったと書かれていた。<br>③「食育だより」の作成に際して、何をどのように伝えるべきかを考えることができ、更なる理解につなげることができたと思う。また、実験や実習をして「楽しかった」というだけでなく、そこで学んだことが何かを整理しなおすことができた。<br>④他のクラス・班の内容をみて、大変関心をもち、更に次の課題では内容や表現を向上させたいという意欲がみられた。 | | | | |
| 今後の課題 | この教科の担当は前年度１年間だけであったため、再度行うことはできないが、次回同じようにするのであれば、班を時々変える等の工夫が必要だと思った。協力しながらできる班もあれば、一部のメンバーだけの負担になっているケースもあったからである。例えば、実習期間がずれており、休んでいるメンバーがいた場合の、評価の方法についても、最初に明確にしておくべきだったと反省している。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 保育・教職実践演習（幼） | 必選区分 | 選択 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 短教２年 | | 受講者数 | 約 40 名 | |
| 最も力を入れた取り組みポイント | □　理解を深める取組み<br>□　意欲・関心を高める取組み<br>□　発言を促す取組み<br>□　時間外学習を促す取組み<br>□　学習態度を良くする取組み<br>☑　その他（実践力を高める取り組み　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | １クラスを９グループに分け、４名～５名で保育指導計画を立案し、附属幼稚園、近隣の公立幼稚園において保育実践実習を行わせて頂いた。実践内容は今まで実習園においても体験出来なかった保育内容、又は４～５人で取り組むから可能な保育内容等、実習の反省をもとにもう一度挑戦してみたい内容等を立案すると共に、仲間と教材制作に取り組み、実施することにした。 | | | | |
| 取組みの効果 | 実習での反省課題を皆と共有、分有しつつ学びの機会となった。実践を行う時、導入役、絵本の読み聞かせ役、ピアノ役等の持ち場を決め、連携を行う事は保育所での複数担任のクラス経営の学びとなった。当日ビデオ収録をして、後日グループ協議等、客観的に自分の保育行為を見つめる機会となった。沢山の保育実践例をクラス全員で確認できたり、友達の保育力からの学びの機会となった。 | | | | |
| 今後の課題 | 現場を利用させて頂くため、その園の教育課程や長期・短期指導計画の流れのなかで行う必要があり、打ち合わせ、事前訪問等、講義時間外での取り組みが多くあった。また現場の意向を受けつつ進めることがとても重要であった。<br><br>[ 失敗事例１]<br>絵巻物製作（かにむかし）では民話の最終部分で、猿が皆にこらしめられる場面があるが、実習年にテレビドラマ等で「倍返し」が流行中であり、お話を変更してほしいと園長から助言を受け、場面変更を余儀なくされた。 | | | | |

| 授業形態 | 演習 | 科目名 | 幼稚園教育実習（前任校科目） | 必選区分 | —— |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | ———— | | | 受講者数 | 約 50 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 関西国際大学で担当した幼稚園教育実習事前事後指導において、実習前に一定水準の保育技術を習得することを目指し、手遊び・ダンス・絵本読み聞かせ検定を実施した。その際、手遊び・ダンス用には「表情」「動作」「声」「遊びの展開」「習得度及びアレンジ」の５領域を設定し、絵本読み聞かせ用には「表情」、「絵本の操作」「声」の３領域を設定し、いずれも３段階で評価できるルーブリックを作成した。検定後、ルーブリックによる評価を学生に返却することで、自身の課題と目標が同時に理解でき、実習前の各自の練習時の指針にできるよう配慮した。 | | | | |
| 取組みの効果 | アンケートの自由記述欄に取り組みを評価する記述が数件みられた。また、保育技術の習得水準が低い学生をフォローしていく上で、一定の評価基準を設けたことは有効であった。 | | | | |
| 今後の課題 | 本学での担当授業で、現時点でまだルーブリックの活用はできていないが、今後、担当科目用にルーブリックの内容を修正し、担当の演習科目内（乳児保育）で実施したいと考えている。 | | | | |

| 授業形態 | 実技 | 科目名 | 造形Ⅱ<br>（本学の教科図画工作にあたる前任校科目） | 必選区分 | 選択必修 |
|---|---|---|---|---|---|
| 開講学科・学年 | 教育学部２年 | | | 受講者数 | 約 40 名 |
| 最も力を入れた取り組みポイント | ☑ 理解を深める取組み | | | | |
| | □ 意欲・関心を高める取組み | | | | |
| | □ 発言を促す取組み | | | | |
| | □ 時間外学習を促す取組み | | | | |
| | □ 学習態度を良くする取組み | | | | |
| | □ その他（　　） | | | | |
| どのような方法を取り入れたか | 作品提出の翌週授業始めに、鑑賞の時間を設ける。<br><br>学生が来る前に全員の作品を掲示しておく。<br><br>授業のはじめにそれぞれの作品に近寄って見たあと、教員が気になる作品を一つあげて感想を述べる。つぎはその作者が気になる作品を紹介していくという方法で鑑賞をする。これを『いいねのバトン』と称し、リレー形式で発言をつなげていく。 | | | | |
| 取組みの効果 | 先週仕上げたばかりの作品は、関心が強い傾向がある。<br><br>授業前に作品を掲示しておくことで、来た人から自然と作品の前に群がっていく。<br>友人同士指をさして作品を紹介したり、「すごいね」「あれはどうやって描いたのかな」などの感想や疑問があちこちから聞こえる。意欲が授業前から高まっていくのがわかる。<br><br>授業が始まったところで、全員で近寄って見る。<br>ざっと見たあと、いいねのバトンをまわしていくと、それぞれの学生が見つけた表現のおもしろさや工夫点に対して理解が深まっていく。また、異なる見方にも気づくことができる。 | | | | |
| 今後の課題 | 以前、授業アンケートで「他の人の作品を見たい」というコメントが数名からよせられ、この鑑賞方法を検討した。<br>作品制作に十分な時間を確保すると、見せ合い、意見をかわす時間が不足する。そのため、授業前に作品掲示をする方法で学生の希望に応えることとした。<br><br>勤務校がかわり、今後は学内展示をして、異なるクラスや学年の作品を見れるようにし、授業時間以外でも理解を深めたり関心を高めていく環境をつくっていきたい。 | | | | |